〈編集後記〉

D M Z

10月21日から，「日韓基礎生物学セミナー」（研究代表者，東北大学農学部，日向康吉教授）がソウル大学で開かれて，それに参加した。その折りのエクスカーションで，板門店を訪れた。その昔，小鳥のなわばりが縄のような線ではなく，ある幅を有することを売りものにしていた筆者としては，線である軍事境界線（Military Demarcation Line）の両側に南北各々に2 kmずつ200km 以上にわたって続く，DMZ（Demilitarized Zone；非武装地帯）の帯は，動物にとってテリトリーの境界とは何かを改めて考えるよい機会となった。

ところで，約40年間，ほとんど一般人が立ち入ることのなかったこのDMZは，今ではナベズルやマナズルなど貴重な鳥類の最も安全な越冬地として，いわゆる完全な動物保護区の役割をはたしているのはなんとも皮肉な話である。

似たような話は我国でも耳にする。例えば信太山の自衛隊演習地が大阪での数少なくなった自然草原だったり，磯子の米軍の弾薬庫跡に立派な自然林が残ったり，北九州市でも，やはり日本軍のかつての弾薬庫跡が山田緑地として残ったりしている。残らないより残った方がもちろん良いが，軍事関係でないと残らないというのは，腹の立つ話である。

本号は，またまた村上さんに特集記事をいただいて会報を充実させることができた。また，本会会長の四手井先生から，すばらしいお話を聞き出して下さった渡辺さんにも深く感謝したい（山岸　哲）。